

張海燕 学位（博士）請求論文審査報告書
論文題目：『^{古今}英草紙』に表現された白話語彙の研究

都賀庭鐘『^{古今}英草紙』（以下「英草紙」）は明代白話小説の翻案9篇からなる作品集で寛延2（1749）年に刊行された。これが「読本」のジャンルを開いたことから庭鐘は「読本の祖」と称されている。

「読本」は明代白話小説に表現される語彙をそのまま翻訳語とし、これを日本語の文体に用いて形成された小説を指す。作品中には翻訳語としての白話語彙を新漢語として文に埋め込むことで、「英草紙」の文体は近世の教養階級を魅了し、彼らの知識欲を満喫させた。さらに白話語彙 - 近世では「唐話」と呼称された - の新奇さのゆえに、「英草紙」以後「読本」は近世を代表する文学分野となり、上田秋成『雨月物語』、建部綾足『本朝水滸伝』、曲亭馬琴『椿説弓張月』等が流布した。近世の読書階級は唐話学習者にとどまらず、漢学者、文人また貸本屋を通じて多くの人々へと浸透していった。とくに読本に使用された白話は古代から継承される文語ではなく、口頭語を基盤とした明代小説の語彙によって成った文体であり、日本近世の新たな文章世界を形成し、多くの読本作家を輩出し、愛読者を生んだ。

本論文はこのような白話を文体形成の基本要素として成立した翻案小説集「英草紙」に関し、翻訳語であり新たな日本語語彙となって表現された小説中の白話をその構造と性質とを総合的に深く分析し、その本質に迫ろうとした最新の試みである。この研究は近世文学史研究にあっては読本の文体を精査するための基礎となるものであり、言語研究においては日本語史と中国語史の双方の言語史研究に資する研究であるものと評価できる。

論文の内容を具体的に記す。すなわち「英草紙」に収められた9篇の翻案作品は庭鐘によって明代白話小説の中でも三言（『喻世名言』『警世通言』『醒世恒言』）と称される短編小説集120篇から精選された作品の読解を経て、翻案されている。こうして「英草紙」が近世を代表する翻案作品であること、言語表現史においてもこれが近世における文体変革の契機になったこと等、文学・語学にわたる価値を認め、本論文の精密な表現分析を必要とする作品と認めたところにこれが分析対象として選択されたのである。なお、修士論文では「江戸中期小説の語彙研究」として、すでに洒落本とともに「英草紙」の語彙分析の試みがあるが、本論文ではここからさらに「英草紙」に限定してこれの徹底的な白話語彙分析に及んだのである。

ここでは全作品から白話語彙1338語を採集し、30種類に意味分類した語彙表を示し、さらに典型例として選択した88語についての分析を試みている。その内容は先行研究においてはほとんど言及されることのなかった新たな視点から、近世で受容された白話語彙を日本語史、中国語史の双方において語の出自、構造、また各々の語の性質を詳細に探った実証的な論文となっている。

本論の構成は五章から成り「序章」で「英草紙」分析に至る概要が述べられ、語彙分析に関しての「凡例」が置かれる。第一章では「白話」の概念について論じる。すなわち「白話の概念」を整理、考究するための手続きとして「Ⅰ中国文学史研究における文言と白話」として本論の核心となる問題点を指摘し、ついで「Ⅱ中国語文学の研究史における白話概念と問題点」として辛亥革命以降今日に至る研究史を整理する。さらに「Ⅲ本論文における白話の概念規定」として張海燕氏の白話への認識を示し、「Ⅳ日本における白話研究の問題点」として現在までの日本における研究論文を精査し批評している。

こうして今日に至る過程で白話の概念がいかに考察されてきたかを整理し白話の概念を規定する。これは今日において最新の深い考察と評価できる。具体的に言えば、張海燕氏は本論文ではまず辛亥革命後、胡適が主導した白話文学運動に言う「白話」というタームとは切り離して扱う必要をいう。それは白話文学運動が新時代の文体獲得のための文学運動として展開されたのであり、近代日本における言文一致運動に似て、言語学的な課題としての「白話」概念の把握とはまったく性格を異にするためであり、こうしてここでの検討対象からは外し、問題の核心が「文言（日本でいう文語）」性と「白話（日本でいう口語）」性についての議論にあるものとする。

つぎにこの認識にしたがって、はじめに中華民国初期以来の中国学者の見解を整理する。そして現代以前その大半の議論が中国文学史において捉えられたこと、また文学史的な考察では先んじた明治期の日本人学者、さらに中国人学者の見解の基本認識には四書五経以来の「文言」中心の論議に終始し、厳密な意味で「白話」と「文言」をめぐる規定にはいたらなかったことを明らかにした。

ついで20世紀中国語学の研究において王力、呂叔湘、張中行、蔣紹愚、徐時儀等の中国の言語学者の規定する「文言」と「白話」に関する見解を詳細に整理している。それによれば、「白話」が文体史の上でどのような傾向を示したかをいえば、明代前後で大きく二分され、先行研究においては明代口頭語が基本文体の要素として台頭する以前の文体は「文言」が主とされてきたことの経緯を確認する。

その見解は漢代文献から白話の存在を認める張中行、唐代からという王力、呂叔湘、南宋からとする周祖謨のように白話の文献確認はまちまちである。こうした諸見解に対して張海燕氏の見解は春秋時代中期の『詩経』に顕れた事例を指摘、ここを起点とする。こうして白話の中国語史における位置確認をしたのち、本論文においてはその検討に南北朝以前、唐代以降宋・元まで、また白話全盛期となる明・清と「白話」の文献的表れを識別した。

しかし一方白話のさらなる識別意識が中国人学者には存在し、20世紀の中国語を基準として「白話」について清以前を「古白話」と一括して「現代白話」と識別する研究現状を指摘する。

ひるがえって日本の白話研究者に及べば、上のような中国語史的な視点に立

った認識はみられず、近世に受容した白話語彙をただ単に白話とするのみである。

しかし張氏の見解は、たしかに現代の「白話」は明清の言語と比べれば当然新しく、相対的に清以前の言語は「白話」といっても古く、それらを「現代白話」として捉えることには制約があるものとし「古白話」ととらえる考え方に一定の理解を示すが、一方現実の研究現状を是認し、本論文ではあえて「読本」に表れた語彙をすべて「白話」とした。

ただし、どの言語においても書きことばを口頭語そのまま記述して文書とすることは一般的には存在しない。その意味において現在の中国言語学者は「白話」を「文言」と同様に書きことばの一種であると規定する見解を受け入れる。

しかし、張海燕氏はこれをほぼ純粋にその時代の白話で表現された明清とそれ以前を分け、多少とも書きことばとしての白話要素が増加してくる言語史的な言語把握の峻別により、上述したように唐代以降明以前、唐代以前を南北朝以前と呼び変えて白話の顕れる時代を限定したのである。

こうして第一章の白話の概念を規定しようとする研究は本論において嚆矢となる意義を有するが、この考察に基づいて、第二章では『英草紙』に表現された白話語彙の分類として、『英草紙』から採集した全語彙 1338 語を意味別に 30 種に分類した語彙表を掲げ、翻案小説に採用された語彙の分布を示した。

つぎに第三章ではこの語彙表から典型例と選別された 88 語、うち日本語史上『英草紙』を初出例とする語彙を中国語史上における出現時のどこに位置づけられるかを分析するために、1 南北朝以前、2 唐代から元代まで、3 明・清と三類して、各語彙の出現時を示している。

この分析目的は日本語史において近世作品『英草紙』が初出であっても、中国語史上ではどこに由来するかを述べることによって、日中双方における各語の語彙史上に位置づけようとする試みである。すなわち、白話環境は明・清に顕著になった口語表出の時代を典型とし、萌芽期であった唐代と宋元への継承期、ほぼ文言が支配した南北朝以前と三分する。これを純粋な「白話」とし、それを明・清出現の語彙、文言世界であった南北朝以前における語彙の白話化、白話萌芽から成熟過程の唐・宋・元の白話と三類したのは、白話識別の方法であった。

こうして第三章では「『英草紙』が初出例である白話語彙の分析」として「Ⅰ語の出自が南北朝以前である『英草紙』白話語彙、Ⅱ語の出自が唐・宋・元である『英草紙』白話語彙、Ⅲ語の出自が明・清である『英草紙』白話語彙」の三類に分けて論じている。

さらに第四章では第三章の結果に基づいて、「語の出自が南北朝以前である『英草紙』白話語彙の分析」のタイトルの下、それらの語彙を「Ⅰ日本近世以前に受容されたとみられる白話語彙、Ⅱ日本近世に意味変化あるいは新たな意味が付加されたとみられる白話語彙、Ⅲ日本近世に受容されたとみられる白話語彙」として日本における受容の傾向を語の受容が日本近世の前後のいずれか、ま

た日本近世において意味変化、新たな意味が付与されたとする受容事実を整理している。

最後に第五章では、観点を変え、「語の出自が唐代以降である『英草紙』白話語彙の分析」として「Ⅰ日本近世以前に受容されたとみられる白話語彙、Ⅱ日本近世に意味変化あるいは新たな意味が付加されたとみられる白話語彙、Ⅲ日本近世に受容されたとみられる白話語彙」として、「終章」に至る。

上のように本論文が目途する内容は、『英草紙』を通じてその文体形成の根幹に明代白話小説の語彙基盤が作用し、日本語史、文学史における新しい表現価値の源泉を明らかにしたものである。またその考察の基本には、中国語史、日本語史における語彙史的な位置づけをもはかっている、これが日中双方における言語史研究に寄与するところが大きいものと評価することができる。

なお、あえて説明を要する点を指摘するならば、まず分析の対象とした88語についての選択基準、あるいは語と表記について、また白話語彙の漢字とルビの文体上の表現効果を表記論的視点から深く追求すること等、また注記における重複などの是正を経ればいっそう説得力のある論文となったことなど今後の課題として克服してほしいと考える。

以上、多少の今後に残す問題点があるものの、今後に期待するところが大きい。このような審査内容と本年1月30日に開催された公聴会の結果を踏まえ、本論文が博士(文学)の学位を授与するのにふさわしいものと認め、審査委員の全員の合意を得るに至ったことを報告する。

平成28年2月25日

主査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻
教授 岡田袈裟男

副査 立正大学大学院文学研究科国文学専攻
教授 島村 幸一

副査 早稲田大学文学学術院
教授 古屋 昭弘